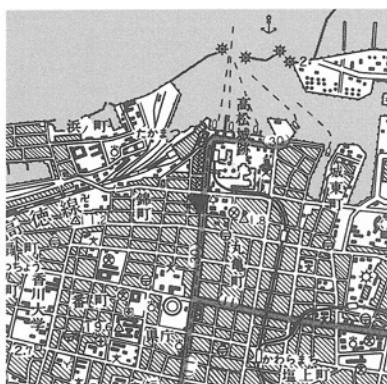




(高松)

調査地は旧高松城の外曲輪にあたり、絵図によれば、中・下級クラスの武家屋敷が並ぶ一画に位置している。発掘調査の結果、屋敷の境を示すと考えられる南北方向の溝や柵列を検出し、近世を通じて東西に二軒の武家屋敷が並んでいたと推定される。絵図や文献資料から拝領者に幾度かの変遷が認められるが、概ね東側の屋敷は一五〇―三五〇石クラスの旗奉行や横目役、

香川・高松城跡（寿町二丁目地区）

たかまつじょう
ことぶきちょう

1 所在地 香川県高松市寿町二丁目

2 調査期間 二〇〇六年（平18）一月～三月

3 発掘機関 高松市教育委員会

4 調査担当者 小川 賢

5 遺跡の種類 城郭跡（武家屋敷）

6 遺跡の年代 近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は旧高松城の外曲輪にあたり、絵図によれば、中・下級クラスの武家屋敷が並ぶ一画に位置している。発掘調査の結果、屋敷

西側の屋敷は役料のみの儒学者や軍学者などが拝領者となっており、一定の格差が認められる。

木簡は、東西双方の屋敷地において各一点、計二点が出土した。

東側の屋敷地では、敷地の隅に位置する大型の水溜状遺構SX一〇〇一の下層から、陶磁器類や木質遺物とともに出土した。一七世紀から一九世紀までの遺物が混在して認められ、木簡の年代は不明である。一方、西側の屋敷地では、桶製の井戸SE一〇〇二から、陶

磁器類などとともに廃棄された状態で出土した。この井戸からは硯が数個体分出土しており、うち一点の硯背には、「龍腦麝香 南都油」の刻書が施されていた。これは墨の産地や原料、香料を記したものとみられる。井戸は一八世紀前半までの所産と考えられ、

当該期の屋敷拝領者として、渡部

小三郎あるいは中村彦三郎が想定される。『高松藩士由緒録』によ

れば、渡部小三郎は貞享三年（一

六八六）に惣領組に召し出された

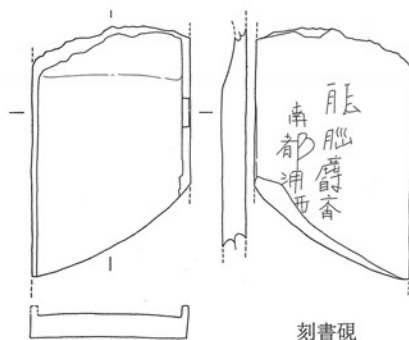
七〇俵四人扶持の軍用役で、中村

彦三郎は元文二年（一七三七）に

召し出され、二〇人扶持中寄合儒

学者、後に百俵五人扶持使番格と

なっている。



刻書硯

8 木簡の釈文・内容

SX1001

(1) 〔若カ〕
〔州阿立〕

89×21×3 051

SE10011

(2) 〔V〕
〔V〕

・〔V〕
〔V〕

117×20×5 032

(1)は板材の下半部を失らせたもの。地名あるいは人名を記したものとみられ、荷札と推定される。

(2)も荷札と推定されるもので、上部の左右に切り込みをもち、下部には釘孔あるいは紐孔とみられる穿孔が四カ所認められる。両面に墨痕があるが、いずれも薄く判読しがたい。

なお、木簡の釈読にあたっては、高松市歴史資料館の大西由子氏・堀純子氏のご教示を得た。

9 関係文献

香川トヨタ自動車株式会社・高松市教育委員会『高松城跡（寿町二丁目地区）』（高松市埋蔵文化財調査報告一〇四、二〇〇七年）

（小川 賢）

